別紙１

# 寄贈作品

## 作品１

**作品名**　壺
**産　地**　越前窯
**年　代**　鎌倉時代（13 世紀）
**寸　法**　器高 26.7cm　口径 15.4cm　最大径 26.0cm　底径 17.8cm
**備　考**　肩に「十」窯印あり

**作品の評価**

鎌倉時代の越前焼の壺。丸みを帯びながらも力強く張った肩が鎌倉時代の特徴を示す。全体的によく焼き締まり、古越前らしい褐色の器肌が美しい作品。越前独特の「ねじ立て技法」で成形されており、表面を横に撫でて仕上げている。肩の部分には黄土色の部分が見られるが、これは薪の灰が降りかかって「胡麻」と呼ばれる釉となったもの。同じく肩には「十」の窯印が刻まれている。

## 作品２

**作品名**　鳳凰刻文中壺
**作　者**　塚原芥山（つかはら・かいざん）
**年　代**　昭和時代
**寸　法**　器高 19.1cm　口径 10.8cm　最大径 23.1cm　底径 11.5cm
**出品歴**　福井県陶芸館「塚原芥山遺作展」（1975 年）

**作品の評価**

塚原芥山は 1907 年福井市生まれの陶芸家。福井中学校を卒業後、飛島組や福井新聞社勤務を経て、今立郡南中山小学校に代用教員として赴任した。21 歳頃から陶芸をはじめ、23 歳の時に昭和を代表する陶芸家である加藤唐九郎に師事。以降、毎年のように唐九郎の元を訪れ指導・援助を受ける。24 歳で独立し福井市木田に「花子窯」を築く。28 歳で「越路」窯に変更。肺結核を患い、38 歳で死去。

芥山はロクロの技術が極めて高く、師の唐九郎をして「彼ほどの技術の持ち主が、今日でも瀬戸中にいるかどうかは疑わしい」と評された。桃山時代のやきものを研究・再現をした唐九郎の影響で、芥山も桃山時代のやきものを中心に作陶していた。

本作品は壺に羽を大きく広げた鳳凰の文様を刻んだ上から釉薬をかけており、貫入が全体に入っている。美しく整った形からは芥山のロクロの技術力の高さが伺える。桃山陶を中心としながらも分野にとらわれず制作した芥山の作陶の幅の広さを象徴する作品である。